

続・埋忠明寿と前銘「城州埋忠作」をめぐる一考察(三)

(2)「江戸埋忠」加治右衛門就受家と菩提寺「長明寺」

飯田 一雄

「江戸埋忠」の後裔が東京千代田区神田に在住し、菩提寺が台東区谷中にあることがはっきりし

た。次は長明寺の過去帳および墓碑による調査報告である。

埋忠家のいまの頭主は埋忠英寿郎氏、明治の廃刀令までは鐔の製作をしていたと伝え、以後は鳶職に転じて家職としてきている。同家には明治頃まで鐔が保存されていたが、いまはなく、家系図のほか資料類なども焼失して伝えられるものがない。

「江戸埋忠」は埋忠明真の系脈

東京都台東区谷中、日暮里駅の近くにある日蓮宗・日照山長明寺(木内玄康住職)は、慶長十四年に日長聖人によって開基した。開基檀方は志村八郎兵衛なる徳川の旗本で、家康から拝領した屋敷を寺として開闢する許しをえて、京都から聖人を招聘したのが長明寺の起りである。これまでに少なくとも二回以上焼失の難を経たが、今次大戦

では災禍を免れている。同寺は天保十年頃に再建され、谷中で有数の古刹に数えられており、大正末年から昭和初年にかけての頃に正運寺と合併して現在に至っている。

埋忠家の墓碑はいま三基がある。一は大正二年七月、埋忠梅次郎が建立した「先祖代々の墓」であり、他は「埋忠明真五代目埋忠加治右衛門」と「埋忠明真六代目埋忠加藤次」のもので、この二基は墓地の南西の端に竹の囲いをされて完存している。昭和十九年初め区画整理によって道路が拡



日照山・長明寺



現在の埋忠家の墓石

ある。従って両説とも古書の誤謬によることが明白である。加治右衛門、即ち二代就受の正しい没年は「宝暦十一年四月二日」である。過去帳は享年の記載を欠くが、恐らく八十歳前後かそれ以上であろう。

3、『装剣奇賞』（稲葉通龍）が「加治右衛門と称す、一流なり。金四分一、地金よく、鍍金もあつくかけて、すりはがしなど旧ありて賞するに

(一) 加治右衛門就受の墓碑



(左側面)



たへたり。加治右衛門と名を揚げられし事、手柄というべし。」と賞揚した人にあたり、「江戸埋忠」中で出色の上手であって、「金摺りへがし」の手法を得意として世人に歡迎された。

4、「加治右衛門の父」は「享保十四年七月十七日」に没した。戒名は「宗順院日悟信士」である。俗名は記載を欠くが、初代就受到該当する。京都で生まれ、のち父につれられて駿河から江戸へ移り、江戸本郷湯島に住したと伝える人である。就受銘の鐔に「享保七年六月二日 行年八十二歳」と刻したものがあ

る（『日本装剣金工史』）ことから享年は八十九歳、逆算すると生年は寛永十八年である。

5、初代就受の生年が寛永十八年であることには見逃せない重要性がある。明真彦市の没年は不明であるが、『埋忠銘鑑』にみる注記で明真彦市の細工の最終年紀は「寛永十五年卯月四日象眼仕候」であり、この年より三年後に初代就受が生まれている。寛永十八年に明真が生存していなかったとしても、初代就受の父、それは嘉兵衛正次と伝承する者の代には明真が健在であったことは確かで、ここに就受家が「明真五代目」また「明真六代目」と冠称した意図に信憑性をもつといえる。「埋忠系図」が遠祖を三条小鍛冶宗近と自称した架空の創作とは対照的である。

初代就受は明真の孫の代に当る。『刀剣鑑定歌伝附録』が記述するところによれば、明真子「彦右衛門重長」は大猷院（徳川家光）

埋忠加治右衛門尉



埋忠就受

就受の肖像画（「鑽工廿八気象」）『嘉治右工門宝暦二年卒七十五』は「加治右衛門宝暦十一年卒」が正しい

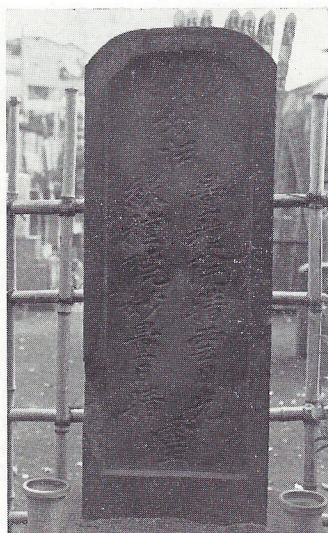
嘉治右工門宝暦二年卒七十五



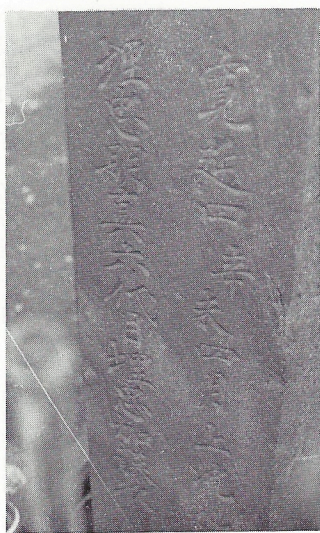
から扶持を頂戴し御用をつとめたが、病身のため辞任して帰京した。重長と嘉兵衛正次が別人であって正しく存在したとして、両者を兄弟とみれば、初代就受が「正次の子で明真の孫」であるという仮説が成り立つ。

なお、後代の就一が「行年七十一歳埋忠十代目忠信齋就一（花押）」と作品に切つて、埋忠十代目を自称した事実は、「明真十代目」を意味するにほかならない。

(一) 加藤次泰貞の墓碑



(左側面)



三代埋忠泰貞（埋忠明真六代目加藤次）

(二)「埋忠明真六代目埋忠加藤次」は寛延四年四月九日に没した。戒名は「量種院晴雲日光」である。妻は明和七年十二月六日に没し、戒名は「縁種院妙量日晴」である。

「加藤次」は、加治右衛門就受の子で泰貞であり、江戸埋忠三代目、明真六代目に当る。

1、古書はいずれも「嘉藤次」としているが、正しくは「加藤次」である。

2 江戸埋忠三代目は「旧姓関川氏、通称を嘉十郎」といい、奥州盛岡の出身で、二代就受に師事して就寿を銘し、更に師銘の就受に改めたといひ、三代目を継承した」と流布しているが、これは誤説で、江戸埋忠三代目は明らかに「明真六代目加藤次」である。

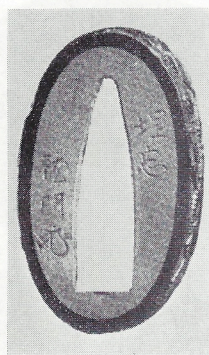
3 従つて就寿は二代就受に師事し、梅忠姓を称したが、師銘の就受は用いていなかったとみるべきであり、就寿と就受は別人である。就寿は晩年の天保初年に郷里へ隠退したと伝え、「奥州盛岡住埋忠就寿」と銘し「天保五甲午春」と刻したものがあつた（『刀装小道具講座』）。江戸埋忠家中で銘に「寿」の字を用いるのは就寿のみで、過去帳によると道号に「寿」字を用いた埋忠姓で唯一の例に「明和五年十一月八日」に没した「善性院道寿・日延」がいる。俗名が「埋忠久四郎」とあつて、就寿の通称嘉十郎とは一致せず、没年が天保よりかなり遡るのが不審である。しかし天保五年には、就寿の師二代就受が没した宝暦十一年より七十三年後という長年数を算することから、天保五年を切つた「奥州

盛岡住埋忠就寿」は二代目就寿とみることも考えられる。これによつて推量すれば明和五年に没した「埋忠久四郎」が初代就寿である可能性は捨てがたい。

4、「加藤次」の子は「嘉次エ門」である。過去帳には「加藤次」の妻である妙量日晴を「埋忠嘉次エ門の母」と記載していることから明瞭である。

5、「加藤次」の子「嘉次エ門」の工銘は就門か就方である。前者によれば就門の俗名を「加・二右エ門」（『金工鐔寄』）、「加・次右衛門」（『日本装剣金工史』）とした記述は訂正を要する。

6、『鑿工譜略』が「就門 加・二右エ門泰貞男梅忠ト改」と記述したものにれば、嘉次エ門就門は加藤次泰貞の嫡男で正系四代目（明真七代目に当る）の継承者である。就方を四代目とする説は、『金工銘譜』の「泰貞男 嘉次右エ門梅忠ト改」から来ている。どうも就門と就方の記述が混合しているが、ここでは四代目を就門として採つた。



埋忠就門
(刀装小道具講座)

以上によつて「江戸埋忠」の初代から四代までが明らかとなった。他に過去帳から抄出できる主なるものを没年の順に列記する。

①埋忠加 吉 寛延三年三月四日 観理院通信日等

②埋忠久四郎 明和六年二月十五日 是性宗記

③埋忠嘉 吉 安永九年八月八日 持法行円

④埋忠久四郎 文化九年九月十六日 真浄白性信士

⑤埋忠嘉源次 文政十二年七月廿三日 顯操院円道信士

⑥埋忠卯兵衛 天保三年十月廿九日 霜縁信士

①埋忠加吉は「求沈」で、「埋忠加吉作と切る」ものに当り、二代就受の子であろう。信士とも居士とも両様の記載がある。

③埋忠嘉吉は「沈深」または「見次」である。年代的には前者が妥当である。信士である。

⑤埋忠嘉源次は過去帳に「加源次とあるが、「加」は再写のさいの誤記で「嘉源次」が正しい。「明受」または「明就」である。

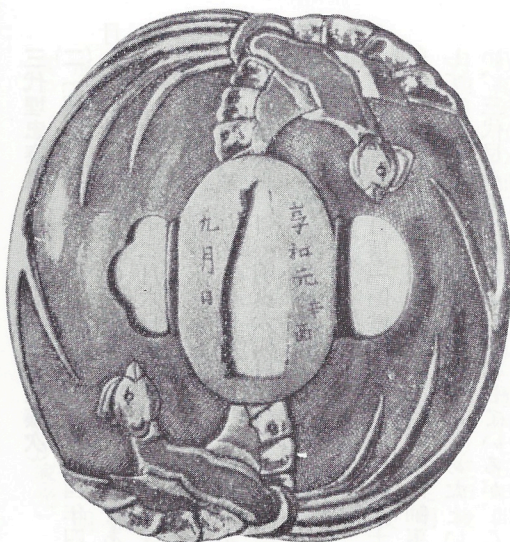
梅忠就方作鐔（「たがね」から）



就受の子梅忠就方

作品をままみるものに就方がいる。就方は就受の子とするのが通説である。「行年六十歳作 梅忠就方（花押）」「享和元^{辛酉} 九月日」と銘した鐔がある。

これによれば、就方は父二代就受が没した宝暦十三年には二十歳、兄とみられる三代加藤次泰貞の没年宝暦元年に十歳、同じく加吉求沈の没年寛延三年には九歳に当る。これらを是認した上で考へれば、就方は二代就受の晩年の子であり、同時に三代泰貞と加吉求沈は比較的若いうちに没したこととなる。過去帳は就方に該当する確な記載を欠く。ちなみに前出の⑥埋忠卯兵衛没、天保



埋忠就方作鐔（文化十年時の作）



三年には九十一歳に当る。就方の作鐔に「行年七十二歳」と切ったものがあり、この年は文化十年である。長命者の一人であったことは確かである。

明真流 “就受家系譜”

二代就受、三代泰貞の墓碑に、「埋忠明真五代目」「埋忠明真六代目」と刻名していることは注目し値する。就受家が明真からの系脈であることが知られるからであるが、明寿、また寿斎から何代目としなかったことは、明真家が明寿家また寿斎家と別家であったことを表意する。

明寿と明真が親子でないとみたことは既に論述した（本誌二六三号参照）が、仮に明真が明寿の子としたら、ここでは「埋忠明寿六代目」、また

① 明 真 彦次郎
家隆

② 重 長 彦右衛門

③ 正 次 嘉兵衛

初代就受
④ 加治右衛門父
享保十四・七・十七没89才
(京埋忠)

二代就受(明真五代目)
⑤ 加治右衛門
宝曆十一・四・二没

三代泰貞(明真六代目) 四代就門
⑥ 加藤次 天明頃
寛延四・四・九没

求 沈加吉

寛延三・三・四没

就 方

(享和元年60才作)

門人

就 久利助

就 門人

嘉十郎

就 壽

奥州盛岡住
天保頃

“江戸埋忠” 加治右衛門就受家系譜(……は推定)

「同七代目」としていたはずである。明寿や寿斎の名を冠さなかったことはそれなりの当然の事由によることであって、それは就受家の初祖が明真であったとみなすことができる。

明真を初代として、二代と三代を伝承に従って挿入し、系図にまとめると右のようになる。

過去帳に俗名を欠くが、埋忠姓で次の一例がある。

「元禄十年十月八日没 功信院意徳日遠居士」

没年からみて初代就受より前時代の人である。

埋忠正次は「京埋忠」の名があり、通称嘉兵衛、京師一条埋忠町また伏見住、のち駿河から江戸に移り、幕府から町屋敷を拝領したと伝えている。

一説に初代就受と同人で、正次ののちの銘が就受

であるともいうが、正次と就受は別人とみたい。年代からみる限りは正次が元禄十年に没した意徳日遠である可能性は残される。

埋忠家には三つの主流があり、一は明寿家、二は寿斎家、三が明真家である。

明真家は以上にみてきた「江戸埋忠」の系脈をたどることができる。

長明寺を訪ねるとき、埋忠明甫の家系(寿斎家)が知られるであろうことを予期していたが、明真家の系脈に触れることになったのは、全く予想できないことではなかったが、いささか意外であった。「江戸埋忠」の一方の流れは明甫から与三左衛門を経た連綿とした命脈があったはずである。それに触れることができれば「武州住埋忠」、ま

た「梅忠」姓を切った一連の鐙工の仔細が明かされることとなるだろう。

実は明真の後裔とは別に、明甫の末孫らしい埋忠家の所在をつきとめることはできたのである。明甫の一流は江戸後期に埋忠家の衰勢の先鋒となつて、いまに埋忠姓のみを伝え、実質の系脈を絶つに至ったことが惜しまれるのである。

埋忠系図は「京埋忠」の系譜とみられる。通算した本家三十二代良久(安永)と、三十五代宗辰(文政)の代まで実在が確かめられているが、その後の消息は全く不明のままである。これが埋忠本家明寿家の系脈のはずであり、いつの日か手懸りがえられることの縁を期待したい。

(終)